

---

# 魔法少女リリカルなのは 運命を変えし者

怪盗ネオン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 運命を変えし者

### 【Nコード】

N5147Z

### 【作者名】

怪盗ネオン

### 【あらすじ】

世界のために生き世界に嫌われて死んだ。そして再び運命を変えるために力行使する

## プロローグ

「ここはどこなんでしょうか？」

上下黒で統一され所々に赤のラインが入っている  
肩甲骨あたりまで伸ばした赤みがかった髪。右顔面には白い仮面。  
左側は灰色をした瞳をした男  
目の前には土下座をしているご老人

「あの…」

「な、なんじゃ？」

「ここは一体どこなんですか？」

「ここは『天界』じゃよ」

「天界…つまり僕は死んだんですね？」

「その通りじゃよ。じゃからお主はここにいる」

「そうですか…『フエイ』」

僕の右指についている指輪が光り出す  
僕のとなりに白い和服を着て腰まで伸ばした透き通った水色の髪に  
エメラルドの色をした瞳をした女性が立っていました

「どうかしましたか？『アレン』」

「フエイ、僕はどうかやら死んでしまったようです。さすがにその人数には敵いませんでしたかね」

「アレンは悪くありません！あれは組織がアレンを利用しようとして…！」

「結果はどうあれ僕は死にました。僕がいなくなったことで組織は空中分解するでしょうから結果オーライです」

「でもあなたは死んでしまった。私がついていながら…！」

「ペチン！」

「にやっ！」

僕はフエイにデコピンをかました

フエイは涙目でおデコをさすりながらこちらを睨んでくる  
恐いどころか可愛いんだけどね

「お前は悪くない。だから気にしないでください」

「アレン…」

「ねっ」

「…?!／／／（その笑顔は反則ですよ！）は、はい／／／」

「（どうして顔が赤いのでしょうか？風邪でも引いたのでしょうか？でも今はそれより）あなたは何者ですか？」

僕は目の前にいる老人を見据える  
フェイも少しまだ赤いが老人を見る

「わしは『神』じゃ」

「フェイ、この人を病院に連れていきますよ。まだ間に合っはず」

「いえアレン、もう手遅れです。それよりは邪を滅したほうがいいのでは？」

「いやわし本物ね！全知全能の神じゃから！」

「証拠はありますか？」

「これを見てみよ！」

そう言って差し出されたのは一枚の紙

「これは…まあなんとなく納得はしました。これを見せられれば、ね」

「それでその神様が私たちに何のようでしょうか？」

神は懷から何かを取り出した

「それは？」

「お主らアニメは見たことはあるかの？」

DVDだった。タイトルは魔法少女リリカルなのは

「いえ、そんなものとは全くの無縁でしたので」

「そうか……実はお主にこのアニメに出てくる少女たちの運命を変えて欲しいんじゃないよ」

「……僕は運命を変える者、『デスティニーブレイカー』だ。誰も不幸にさせたくはない」

「アレン……」

「引き受けてくれるか？」

「ええ。喜んでお引き受けいたしましょう」

「なら特典を三つまで与えよう」

「別にそんなものはいりませんよ。この力があれば事足ります」

「そうか……」

「そこまで特典を与えたかったのでしょうか？」

「なら一つ。向こうで動くために家と資金を」

「そのことに関してはすでに用意はできておる。金に関しても一生困らない量を用意した」

「太っ腹ですね」

「頼む方なんですからそのくらいは当たり前です」

「なら特典は後々決めるということでもいいでしょうか？」

「それでも構わん」

「フエイ、向こうでも頼みますよ」

「はい！アレン！」

「ではよい旅を祈っておるぞ！」

そして僕たちの足元に黒い穴が現れた

「キャアアアアアア！」

「糞神憶えていてくださいね？」

僕は殺気を込めた黒い笑みを神に向けた

最後に見たのは僕を見て顔を青くしてブルブル震えていた神だった

## プロローグ（後書き）

感想など待ってまーす！



## 第一話

「どうやら僕は縮んでしまったようですネ」

そう、僕の身長が5ゝ6歳ぐらいまで縮んでいたのです。髪はそのままですがこの身長ではさすがに長いと思います

服も身長に合わせて小さくしたただけのようですネ。ですが、仮面は…付いていなかった

焦りましたが、フェイが言うには普通のようにでした

まあそのことは置いて顔もそこまで変わっていませんがさすがに変えてもらったほうがよかったでしょう？前なんか僕は男だというのに男が群がってきて苦労しました

僕たちは現在マンションの一室の前にいる

表札には僕とフェイの名前がありました。ちなみにフェイの容姿は変わっていませんよ？

あとこの姿を見たときフェイが僕を弄り回したのは別の話

「ここが僕たちの家ですか…」

そう言っ僕はドアを開けて中にはいる

中は一通りの家具と電化製品がありました

「綺麗なところですね」

「はい。私はアレンがいればそれだけで充分ですが、こういうのも悪くはないですね」

「そうですね。とりあえず荷物の整理でもしましょうか？」

「そうですね」

数分後

「僕たちの戸籍もあるんですか」

「しかも私はアレンの姉という設定のようですね（私がアレンの姉……キヤアアアアアア！！）」

（いったいどうしたんでしょうか？体をクネクネとさせて……）

僕はなんか面白そうだからそんなフェイをずっと見ていました

数分後

「みつともない所を見せてしまいました／＼／」

ようやく我に戻りフェイは焦っていた

「いいですよ。僕も面白いものが見られましたから（それに記録もしましませぬ）」

「消してくださいよ／＼／！」

「なぜ分かったんですか！？それにこんな面白いものを消すなんてもったいないじゃないですか！」

「アレンはSなんですか！？鬼畜なんですか！？いや……それもいいかも（ボソッ）」

「なんかすごい寒気がするのですが気のせいでしょうか？それとフエイが危ない扉を開けようとしているような気がするんですが！？」

「アレン！私をもっといじめてください！」

「うわぁ！フエイが壊れてしまいました！」

またさらに数分後

「ハア…ハア…、落ち着きましたか？」

「私は一体何をしていたんですか？記憶が曖昧で…」

「もういいです。それよりそろそろ夕食にしましょう。何か食べたものはありますか？」

「いいのですか？アレン」

「ぼくが作ったほうがいいでしょう。それにこれは私の趣味です」

「…わかりました。ではお任せします」

「なら食材を買ってこなくてはなりませんね。あの糞神が金は大丈夫だとはいつていましたが…」

そう言っ僕は置かれてある通帳を見た  
それを見た僕は目を丸くした  
フエイも覗いてきた

「これって兆を超えていませんか！？アレン！」

「これなら一生働かなくても食っていけますね」

そこまである大金を僕に渡したのですか  
驚きを通り越して呆れますね

「では買いに行ってきますか。どうしますか？フェイも一緒に来ますか？」

「いえ、私は荷物の整理をするので」

「そうですか。では行ってきます」

そして僕はマンションを出た

買い物を終わると、すっかり暗くなっていました

「結構冷えますね。早く帰らなくちゃフェイも待ちくたびれている  
はずですから…んっ？」

公園の前を通ると一人の少女が座っていました

僕は気になり近づきました

「どうしたんですか？」

「ふえ？」

少女の目は赤くなっていました。泣いていたのですか…

「もう子供は帰る時間ですが…」

「グスッ…なのはひとりでもへいきなの。それにかえってもだれもなのはとあそんでくれないの」

なにかあつたんでしょうか？

それになのはって…何か忘れているような気がします

「何かあつたんですか？」

「えつと…」

そこで僕はどうしてここで泣いていたのかを聞きました

この子の父親が大怪我をして家族が忙しくなり遊んでくれずにいたことを

「あなたのお父さんは生きていますでしょう？」

「うん」

「なら希望を捨てちゃダメです。その希望にすがりつきなさい。それに家族もあなたを思っているはずです」

「そうなの？」

「当たり前です。それが家族というものです。あなたもあなたの気持ちを伝えなさい。人は言葉でなくては自分の気持ちを伝えられないですから」

「うん！わかったなの！」

「フフツ、とても素敵な笑顔ですね（ニコツ）」

「にゃっ／／／！？（そのえがおははんそくなの〜！）」

（どうしたんでしょう？毎回思うことですが僕が笑うとみんな顔を赤くして顔をそらしますが、…僕の笑顔って気持ち悪いのでしょうか？）

「そんなことないの！あなたのえがおはとてもすてきなの！っ！はう／／／」

僕の心を読んだ上にまた顔を赤くした！

「もう暗いですから送りますよ」

「えっ？いいの？」

「こんな時間に子供が一人で出歩くわけにはいけませんからね」

「むう〜…」

「行きましようか？」

僕は手を差し出す

「うん！」

彼女も僕の手を取る

「ねえ、ひとついい？」

「いいですよ。子供は今は甘えどきですからね」

「むう、あなたもこどもなの！」

「そういえば今僕は子供でしたね」

「えっ？」

「いえこちらの話です。それで？なんです？」

「わたしともだちになってほしいの！」

「ええ。構いませんか？あ、そういえば名前を覚えていませんでしたね。僕はアレンと申します」

「わたしはたかまちなのはなの！よろしくね！アレンちゃん！」

「よろしく願います。あと一つ言っておきます」

「？」

「僕は男ですよ？」

そして僕は耳を塞ぐ

「ふえええええええええええええええええええええええ！！？？」

なのは声が塞いでいる耳によく響いてくる  
久しぶりですね。前の世界でもよく言われたもんですし

「では行きますか！」

「うん！」

そう言うって僕となのはは他愛もない話をしながら歩いていた

「へえアレンくん、ついさいきんこっちにひっこしてきたんだ」

「はい。あつ、あのマンションです」

そう言っ  
て僕は指  
を指した

「あっ！あのマンションうちにちかいね！」

「そうなんですか？」

「こんどあそびにいつていい!？」

「いいですよ」



「やくそくなの！」

「はい。あつ、ここですか？」

## 喫茶店翠屋

この子の親は喫茶店をやっているのか

「ここからは僕は邪魔になる。帰らせてもらおうよ」

「うん！おかあさんとおにいちゃんとおねえちゃんとおはなしするの！」

「頑張ってください」

「うん！」

そう言っ僕はその場を後にした

「あつ思い出した。なのはってあの糞神が持ってたDVDのタイトルにあった」

帰り道で思い出したアレン

家に帰るとフェイが泣きながら心配していたので謝りました  
料理を作っフェイが食べたところによると

「もうあなたはコックになったほうがいいのではないのでしょうか？  
これなら世界のトップに立てると思うのですが」

と、かなりの高評価をもらいました

## 第一話（後書き）

感想や意見を送ってもらえると作者は喜びます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5147z/>

---

魔法少女リリカルなのは 運命を変えし者

2011年12月17日19時45分発行